

お茶の水女子大学 文教育学部 研究紹介集 2025



～未来につなぐ～

Since 1875

創立150周年

Ochanomizu University

～ 文教育学部 目次 ～

役職	氏名	タイトル	頁
文教育学部人文科学科			
教授	神田 由築	日本近世の芸能文化に関する研究	1
教授	長谷川 直子	諏訪湖の結氷・御神渡り記録から日本の冬の気候を復元する	2
教授	宮下 聡子	倫理と心理と宗教の接点を探る	3
准教授	大藪 海	地方からみた中世史	4
准教授	土谷 真紀	とりまく視覚表象を考える	5
准教授	戸川 貴行	儀礼音楽からみた中国古代の伝統の創造	6
准教授	湯川 文彦	人々の経験としての明治維新	7
講師	内山 尚子	エスニック・マイノリティの芸術家による移動と「他者」表象	8
助教	長野 邦彦	日本の前近代の思想と対話する	9
文教育学部言語文化学科			
教授	浅田 徹	和歌の歴史を研究しています。	10
教授	高桑 晴子	ドメスティック・イデオロギーとナショナル・アイデンティティの交差点	11
教授	田中 琢三	モーリス・パレスの後期作品における宗教とナショナリズム	12
教授	谷口 幸代	近現代文学研究	13
教授	野口 徹	人間言語の仕組みを明らかにする。	14
教授	山腰 京子	子どもの驚くべき言語能力を引き出し、その豊かな言語能力を明らかにする	15
教授	和田 英信	価値の衰えない「古典文学」研究	16
准教授	ALLEN DAVID BRIAN	言語教育をサポートするための適切な評価の設計と使用	17
准教授	加藤 夢三	近代文学は科学をどう受け止め、どう「誤読」したか	18
准教授	竹村 明日香	世界は音の不思議でいっぱい！	19
准教授	西坂 祥平	一人一人にとって肯定的な経験となる日本語教育	20
准教授	橋本 陽介	言語と文学の謎に迫る	21
准教授	富 嘉吟	中国で失われた漢文古典を日本で発掘し、世界へ：白居易をはじめとする貴重な漢文資料の再発見	22
准教授	前田 佳一	戦後文学から見るオーストリアの自己像	23
准教授	松岡 智之	日本古典文学の研究	24
准教授	LOWE ROBERT JAMES	批判応用言語学	25
講師	李 址遠	言語を通して社会と文化を見る	26
助教	新居 達也	中世後期・初期近代イングランドにおける文体受容への書物史的アプローチ	27
助教	丸谷 徳嗣	アメリカ南部文学を通じて考える倫理・道徳～地域のアイデンティティと人種問題～	28
助教	水野 輝之	ことばの意味の背後にある論理と構造	29

～ 文教育学部 目次 ～

役職	氏名	タイトル	頁
文教育学部人間社会科学科			
教授	池田 全之	思想研究を通して、現代のあり様を批判的に考察する。	30
教授	小玉 亮子	社会の変化を子どもと教育という視点から考えています	31
教授	杉野 勇	信頼しうるウェブ調査実施についての方法的検討	32
教授	西 隆太郎	子どもと出会う保育学	33
教授	浜野 隆	教育格差の克服に向けた実践的研究	34
教授	浜野 隆	すべての子どもたちに質の高い保育を～乳幼児ケア・幼児教育研修の設計・実施・評価～	35
教授	富士原 紀絵	小・中・高等学校のカリキュラム支援	36
准教授	齊藤 彩	発達障害に関連する特性がある人々の心理社会的適応に関する検討	37
准教授	辻谷 真知子	人がつくる「規範」を保育現場のやりとりから考える	38
准教授	宝月 理恵	20世紀日本において結核患者はいかに在宅療養したのか	40
准教授	三宅 雄大	人間を介して問題／政策・制度・支援を理解する	41
准教授	武藤 世良	尊敬と感情の科学	42
講師	松島 のり子	保育をめぐる制度・政策・環境の歴史を繙く	43
助教	Iris Issen	クィアに交差する世界—国境・身体・物語の再構築	44
助教	渡邊 真之	「消費者としての子ども」の教育史—戦後教育史・子ども史の再構築へ—	45
文教育学部芸術・表現行動学科			
教授	井上 登喜子	音楽文化の「意義」に関する研究	46
教授	新名 謙二	スポーツ消費の時系列分析	47
准教授	岡 千春	ダンスを通して“よりよく生きる”ことの可能性を探る	48
助教	神保 夏子	日本のコンクール文化と西洋音楽受容の関係性を問い直す	49
助教	福本 まあや	舞踊芸術の実践を理論化する	50
文教育学部グローバル文化学環			
教授	小林 誠	グローバリゼーションによって国家権力の構成はどう変わるのか	51
准教授	阿部 尚史	多様な角度からイラン史・西アジア史を研究する	52
准教授	CARROLL MYLES	日本における気候変動の政治経済	53

日本近世の芸能文化に関する研究

文教育学部人文科学科 教授 神田 由築

研究キーワード

近世、都市、芸能、文化、地域

関連する SDGs



研究概要

日本の歴史のなかで、とりわけ近世（江戸時代）は現代の社会や文化の直接の基盤が形成された重要な時期といえる。特に芸能文化においては、伝統芸能なるものの「伝統」性の由来をさかのぼると、ほぼこの時期にゆきつく。都市や村落など芸能を受容した地域社会が大きく変化したのもこの時期である。そこでどのような文化がどのような社会のなかで形成され、それが現代にどのような影響をおよぼしているのか。それは現代の文化のありようを考えるうえで重要な課題である。そこで本研究では近世の芸能文化を、芸能文化をとりまく社会環境の変化（「伝統」形成の外的要因）、芸能作品の内容（「伝統」形成の内的要因）の両面から描き出し、近世から現代まで文化的基盤の形成・展開過程を見通すことをめざしている。

アピールポイント

現在、これまで日本の文化を育んできた地域社会（都市であれ村落であれ）は大きく姿を変え、大きな岐路に立っている。地域の変容は伝統芸能の存続を揺さぶり、また地域社会とともに文化的な基盤も喪失の危機に瀕している。そのような状況のもとで、伝統文化とは何か、地域とは何か、ということをもとに具体的な事象にもとづき歴史の文脈のうえで問い直すことは意味のあることと考えている。こうした研究成果が活かせる分野としては、伝統芸能に関する文化政策や「地域の活性化」という課題を抱える地方政策などが考えられる。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/100001100_ja.html

諏訪湖の結氷・御神渡り記録から日本の冬の気候を復元する

文教育学部人文科学科 教授 長谷川 直子

研究キーワード

自然地理学、気候学、気候変動、プロキシ

関連する SDGs



研究概要

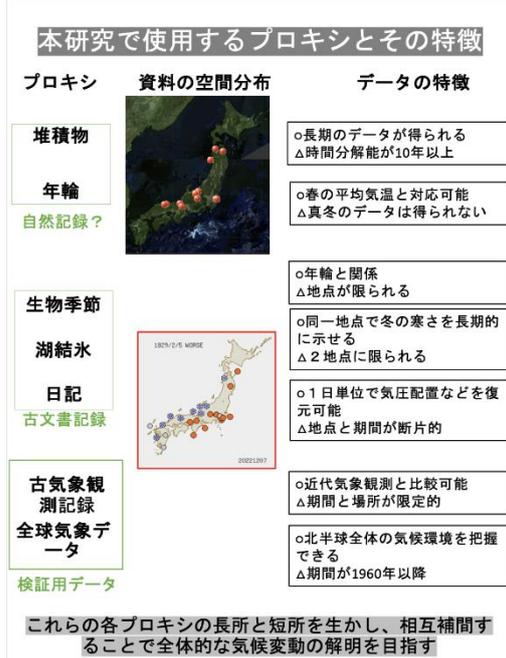
長野県の諏訪湖には、冬に湖が凍ると氷が割れて亀裂が入り隆起する御神渡りという現象が見られ、これに関する記録が現存する最古のものとしては1397年、連続的には1444年からほぼ毎年存在する。この記録には、時代にもよるが、いつ結氷したのか、いつ御神渡りが起こったのかという日時が記録されている。この期日は早い場合には冬が寒いという関係が見られる。そのため、近代的な気象観測が行われる前の数百年について、日本の冬の寒さが年々どうなっていたのかを知る手がかりとなる。現在は、この記録に加え、湖の堆積物、木の年輪、日記などの文書、桜の花見記録などを用いて総合的な共同研究を行なっている。

アピールポイント

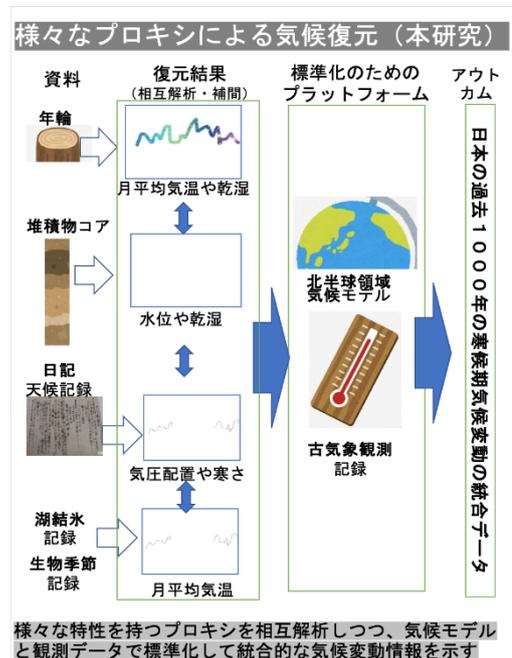
同じ場所で、人がつけた記録としてこれだけ長期的なものは世界でも珍しい。また日本では特に江戸時代を中心に日本全国の藩日記などで記録が存在している。これらの記録から読み取れることが冬の気候状態以外にも様々ある。一方で最近の気候温暖化により諏訪湖は結氷や御神渡りが激減している。これらについても注目している。

参考 URL

〈高分解能マルチプロキシによる過去数百年の日本の気候復元〉 <https://multi-proxy.jp/>



プロキシごとの特徴



倫理と心理と宗教の接点を探る

文教育学部人文科学科 教授 宮下 聡子

研究キーワード

ユング、宗教的倫理、悪の問題、生の意味

関連する SDGs

研究概要

人間のあり方について、人間の内面および人間と超越的次元との関わりという観点から考察しています。主な研究対象は、倫理に関心があり宗教にも造詣が深い精神科医・心理学者の思想です。特にスイスの精神科医ユングの説く宗教的倫理の研究に力を入れています。ユングの宗教的倫理は、善だけでなく悪もそなえた人間のあり方を善悪両面的な神との関連において説くもので、悪の問題への答えともなり得ます。他に、生の意味についてのフランクルの思想、キューブラー＝ロスの死生観、フロムの性格論をとり上げたこともあります。また精神科医・心理学者の思想以外にも、ソクラテスの神理解を追究したり、『ヨブ記』に描かれた義人ヨブの苦難について考えたり、和辻倫理学の宗教性について考察したりもしました。倫理と心理と宗教の接点において見えてくるものを確定すべく研究に取り組んでいます。

アピールポイント

様々な苦難や不条理がある中でも人間が生きる意味とは何なのか、研究を通じてその答えを見出せればと考えています。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000005_ja.html

地方からみた中世史

文教育学部人文科学科 准教授 大藪 海

研究キーワード

室町幕府、寺社、官位、北畠氏、応仁・文明の乱

関連する SDGs



研究概要

日本中世史を専門としています。特に、室町幕府の地方支配について興味を持っています。室町幕府は京都に拠点をおいた全国統治組織でした。しかし実際に全国を均質に支配できていたかということ、そうではありません。そのような支配の質の偏りはなぜ起こり、またそのような偏りがあるなかで幕府はなぜ全国統治組織たり得たのでしょうか。この疑問を解き明かすためには、京都の動向のみならず、支配される側であった地方の動向も把握する必要があります。しかし従来の研究は、この地方の動向を中央の政治情勢に連動させて考えることが十分にできておりませんでした。そこで私は、京都からみた地方の例として伊勢国に着目し、伊勢国を室町幕府がどのように支配しようとしていたのかについて研究を進めています。

アピールポイント

私の研究の特徴は、地方の視点を重視しているところです。たとえば、学校等で中心的に学ぶのは、源頼朝や足利尊氏、足利義満といった人物の行動です。注目されるのも、自然と彼らの活動範囲である鎌倉や京都といった政治の中心地（中央）に限定されてしまいます。しかし歴史は中央のみで成り立っているわけではなく、地方でそれに連動した動きや独立した動きがあったはずで、中央と地方のいずれも視野に入れてはじめて日本史を理解したといえると考えています。現代において私の研究は、地方の歴史を掘り起こす、あるいは捉え直す機会になるものです。地方創生や町おこしにきっと活かせるものであると考えています。

参考 URL

<教員紹介> <https://www.li.ocha.ac.jp/ug/hum/history/teacher/ooyabu/oyabu.html>

<研究者情報> https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000262_ja.html

<researchmap(リサーチマップ)> <https://researchmap.jp/read0136754>



研究で扱っている古文書の一例（〈明応2年〉閏4月11日付伊勢貞宗書状『大藪海氏所蔵文書』）

とりまく視覚表象を考える

文教育学部人文科学科 准教授 土谷 真紀

研究キーワード

美術史、視覚表象

関連する SDGs



研究概要

日本美術史を研究しています。特に関心があるのは、戦国時代に活動した狩野派作品のなかでも「絵巻」という画面形式の作品です。「絵巻」は詞書と絵を伴うもので、テキストとイメージの関係を考えていくことに関心があります。狩野派は、中国絵画の主題に基づき、また中国からもたらされた中国絵画を手本とした作品を多く手がけますが、狩野派の2代目である狩野元信は、絵巻を制作し始めます。絵巻は「やまと絵」という日本で醸成されてきたジャンルで手掛けられ、狩野派のような中国絵画を基盤とする画派にとっては遠い存在でした。この転換はなぜ起こったのかについて研究をしています。また、狩野派の絵巻だけではなく、様々な絵巻作例にも関心があります。詞書と絵は連動するように見えて、時に絵が饒舌に語ることがあります。その読み解きや分析に魅力を感じています。

アピールポイント

日本における中国美術受容の在り方を考えることや、描かれた主題について検討することで、「視線」の不均衡について意識を向けることが出来ます。「美術史学」というと天才画家の才能をたたえるようなことをイメージしがちですが、「美術史学」では作品（視覚表象）の置かれた状況、コンテキストから作品と向き合い、考えていきます。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000164_ja.html

儀礼音楽からみた中国古代の伝統の創造

文教育学部人文科学科 准教授 戸川 貴行

研究キーワード

中国古代、儀礼音楽、正統性

関連する SDGs

研究概要

中国の魏晋南北朝時代（220～589）の儀礼音楽（宮廷の儀式などで演奏される音楽）について研究しています。とくに4世紀初頭の永嘉の乱とよばれる戦乱によって、それまでの儀礼音楽が滅んだ後、どのようにして新たな儀礼音楽が再生されたのかについて追求しています。具体的にいうと、儀礼音楽の再生にあたり、北中国では中央アジア系の音楽、南中国では当該地域の民間音楽が導入されました。さらに、それらをあたかも中国の伝統的音楽であるかのように見せるために、儒教の経典である『周礼』を典拠とする曲名が利用されます。それらは隋唐の儀礼音楽につながっていきますが、近年はとくに南中国の民間音楽の導入から『周礼』の利用にいたる過程について、政治史の視点から研究を進めています。

アピールポイント

これまであまり注目されなかった儀礼音楽の史料について、政治史の視点から考えることで、新たな学問的分野を切り開きたいと思います。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000464_ja.html

人々の経験としての明治維新

文教育学部人文科学科 准教授 湯川 文彦

研究キーワード

日本近代史、明治維新、社会変革、文明開化、教育普及

関連する SDGs



研究概要

日本社会を大きく変えた「明治維新」。当時を生きた人々にとって、それはどのような経験となったのか。社会変革は様々な立場・見解をもつ人々がそれぞれの認識と方法を以て議論し、活動するなかで初めて形をなす。政治指導者や官僚はもとより、中央・地方の議員、知識人、メディア関係者からその他の一般の人に至るまで、多様な意見と活動を丹念に検討し、それらを総合して考察することによって、人々にとっての「明治維新」経験の特質を明らかにする。取り扱う内容も、政治・外交・法制・地方行政・裁判・警察・教育・メディアなど多岐に亘る。近年はとくに教育の普及・定着に向けた人々の議論と活動を研究している。新しい教育を必要としてこなかった社会の人々が、なぜ新しい教育を受け入れ、次第にそれを積極的に追求するようになっていくのか。「教育」をめぐる人々の多様な議論と活動は、その実相を複雑且つ豊かに示してくれる。

アピールポイント

変わりゆく社会のなかで人はどう生きようとするのか、社会を変えるために人は何からどう取り組むべきなのか。こうした問題は歴史的な課題であり続け、現代の関心事でもある。一大社会変革である「明治維新」は、社会変革を人々の人生との関係で理解・考察するうえで有効な対象といえる。今後はより人々の生活・思想と社会変革の関係に注目しつつ、明治維新以後における記憶の形成をも研究することで、歴史的な事象が人々によってどのように解釈・活用されていくのか、明らかにしていきたい。人々が歴史を日本文化・地域振興・消費生活などに活用している現代社会において、こうした記憶の形成に関する研究は多くの示唆を与えてくれると考える。

参考 URL

<教員紹介>

<https://www.li.ocha.ac.jp/ug/hum/history/teacher/yukawa/d003541.html>

<researchmap(リサーチマップ)>

https://researchmap.jp/rm_fyukawa17509

エスニック・マイノリティの芸術家による移動と「他者」表象

文教育学部人文科学科 講師 内山 尚子

研究キーワード

近現代美術史、アメリカ合衆国、マイノリティ、「他者」表象、人種とエスニシティ

関連する SDGs



研究概要

20 世紀のアメリカ合衆国を中心に、西洋近現代美術史における「他者」表象の問題を、エスニック・マイノリティと区分される芸術家の作品や実践（地理的な移動を含む）を具体例に検討しています。

アピールポイント

マイノリティ性を持つ芸術家が、人々の意識だけでなく社会の仕組みそのものにおいて疎外されている状況・歴史に目を向け、尚且つ安易な本質主義には還元することのない視点での研究を試みています。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200001192_ja.html

日本の前近代の思想と対話する

文教育学部人文科学科 助教 長野 邦彦

研究キーワード

日本倫理思想、仏教、道元

関連する SDGs



研究概要

鎌倉時代の禅僧である道元（1200～1253）の思想を中心に、日本の倫理思想について研究している。道元の主著である『正法眼蔵』を読解することにより、人間以外のあらゆる存在（一切衆生）同士の理想的関係とはどのようなものかについての道元の思考を辿ることができるが、そこには、とすれば人間（それも生存し、強い立場にある存在）中心に倫理を考えてしまいがちな現代人の思考の前提をゆさぶるポテンシャルが秘められている。そして、そのような道元の思想と対話しながら、私たちのあるべき自他関係について探究している。

アピールポイント

世界の哲学的・倫理的思索及び実践が発展してゆくための貴重なリソースとして、日本の思想を提供する。日本の前近代における思想の特徴は、近現代のように独立した個人の主観とその根拠を問うのではなく、たとえば「ご縁」という言葉に象徴されるように、自他の関係性の不思議さを問うところにある。そして、輪廻転生を前提にした「ご縁」という言葉を、異なる文化圏（たとえば欧米）において翻訳することはかなり困難であるように、日本の前近代の倫理思想には、既存の前提をゆさぶるポテンシャルがある。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200001110_ja.html

和歌の歴史を研究しています。

文教育学部言語文化学科 教授 浅田 徹

研究キーワード

和歌、連歌、歌学、日本語史、文学史

関連する SDGs



研究概要

和歌は日本文学史のすべての時代を貫くことのできる唯一のジャンルである。文献の残る最も古い時代（奈良時代以前）から、現代まで途切れることなく大量に生産され、残されている。この全体像を見渡す研究は大正時代に行われたのが最後で、以後紹介され続けてきた膨大無辺な資料を把握することは、研究者個人の努力を超えるため、現在は時代ごとの概観しか行われなくなっている。当方はすべての時代において史的なモーメントの抽出を行おうとしており、完成すれば百年ぶりの和歌史観の更新となる。

アピールポイント

扱う時代が広いことがまず挙げられるが、そのほか、日本語学・日本語史の手法の援用や、和歌教授の社会的制度の分析、歌学書の言説分析などを総合して多様なアプローチを試みていることが特徴かと思う。今後もなかなか同様の広さの研究は現れないと予想されるし、継承されることも困難ではないかと思量する。当方の定年は3年後なので、残念ながら「将来展望」には乏しいように思う。なお、産業界にアピールする点は特にない。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/100001310_ja.html

ドメスティック・イデオロギーとナショナル・アイデンティティの交差点

文教育学部言語文化学科 教授 高桑 晴子

研究キーワード

19世紀イギリス・アイルランド小説、女性作家、ドメスティック・イデオロギー、ナショナル・アイデンティティ

関連する SDGs



研究概要

19世紀初頭の女性作家による小説を中心に、イギリスという複合国家が抱える複合的なナショナル・アイデンティティ表象を、家庭(domesticity)および結婚プロット(marriage plot)に絡めて考察している。若い女性を主人公とし、家庭という「私空間」で展開する19世紀初頭のイギリスの地理的なスコープは意外にも広く、イングランド／スコットランド／アイルランド、ブリテン、そして大英帝国と何層にもまたがるイギリスの複雑なネイション意識の形成の一端を担ってきた。1801年のアイルランドとの連合により国内領土が最大となった時代のイギリス小説が「家庭」のアナロジーをどのように用いてこの複雑なネイション意識を扱ってきたかという問いに関心を持っている。これはまた、「私空間」に割り当てられた女性が「国家」に参画するレトリックがどのように機能しているかということを批判的に分析することでもある。

アピールポイント

複合国家としてのイギリスは地域的ナショナル・アイデンティティを尊重しつつ国民国家としての統一意識を喚起するという二つのレベルで機能しなければいけない。近年のイギリスの欧州離脱をめぐる騒動とその余波は、複層的なネイション意識の相克は今なおブリティッシュ・アイルズを揺るがす問題である。そのような今日性を踏まえ、ロマン主義時代のイギリス小説の「ナショナルな想像力」をマッピングしている。また、「ナショナルな想像力」に女性作家がどのように参画しているのかを検証することで、ドメスティック・イデオロギーとナショナル・アイデンティティがどのように交差しているかが明らかになる。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000004_ja.html

モーリス・バレスの後期作品における宗教とナショナリズム

文教育学部言語文化学科 教授 田中 琢三

研究キーワード

フランス文学、宗教、ナショナリズム

関連する SDGs



研究概要

近代フランスの作家であり政治家でもあったモーリス・バレス(1862-1923)を対象とする。バレスは 19 世紀末のドレフュス事件(1894)をめぐる論争を契機に、右翼ナショナリズムの代表的イデオログとなったが、ドレフュス事件以後、とりわけ第一次世界大戦(1914-1918)前後のバレスの後期作品を取り上げる。この時期のバレスは、次第に宗教に対する関心が高まり、カトリシズムや神秘主義に接近していく。他方で、1914 年に第一次世界大戦が勃発すると、バレスは政治家としてフランスの勝利のために愛国的な活動を積極的に展開している。研究の目的は、宗教への接近という内的要因と第一次世界大戦という外的要因が、バレスの後期作品にみられる思想的变化、特にナショナリズムの変容に与えた影響を明らかにすることである。

アピールポイント

バレスのような思想的にナチズムやファシズムとのつながりが指摘される右翼の作家、あるいはカトリシズムなど宗教的な問題を扱う研究は、政治的・宗教的な立場から偏ったものになりがちである。この研究はそのようなヨーロッパのアカデミズムやキリスト教的文脈から離れた立場から、客観的にバレスの政治的・宗教的思想を検討することが可能であり、加えて非ヨーロッパ的な観点からバレスの事例を相対化して分析することもできる。その意味において従来の研究がとらわれていた枠組みから脱して、ヨーロッパ中心ではない真に国際的なバレス研究を切り開くものである。

参考 URL

<researchmap(リサーチマップ)>

<https://researchmap.jp/7000000001>



モーリス・バレス

近現代文学研究

文教育学部言語文化学科 教授 谷口 幸代

研究キーワード

多和田葉子、越境文学

関連する SDGs



研究概要

近現代文学、特に多和田葉子の文学研究に従事している。日本出身の多和田は大学卒業後にドイツに移住し、ドイツで作家としてデビューを果たした。その後、日本でもデビューし、現在に至るまで日独二言語で執筆を続けている。政治的、あるいは経済的な事情による亡命等によって移住先の言語で創作する作家の例とは異なり、自発的に二言語を執筆言語として選び取り、どちらの言語でも旺盛な創作活動を展開している稀有な作家である。世界的に評価が高く、ドイツでシャミッソー賞やクライスト賞等、日本で芥川賞や谷崎賞等、アメリカで全米図書賞翻訳部門を受賞し、また毎年ノーベル賞の有力候補としてメディアで報じられている。このような多和田文学について、書誌情報や年譜等の研究の基盤に関わる調査研究を継続的に実施するとともに、複数言語の往還からどのように新しい言語表現の可能性が開かれるのか、研究を進めている。

アピールポイント

執筆言語の点で、日本語作品、ドイツ語作品の双方を研究対象とし、またジャンルの点でも、小説、詩、戯曲等、多様なジャンルの作品を研究対象とすることで、多和田文学の全体像を明らかにすることをめざしている。文学研究は企業等と連携してイノベーション創成に直接的に寄与することは難しいが、多和田は、気候変動、移民問題、格差や差別の問題等を文学の形で問い続けており、多和田文学が現代社会の直面する諸問題をどのように表象し、可視化しているのかを明らかにしていきたいと考えている。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/100001442_ja.html

人間言語の仕組みを明らかにする。

文教育学部言語文化学科 教授 野口 徹

研究キーワード

文法理論、生成文法、統語論、意味論、形態論

関連する SDGs

研究概要

言語学者ノーム・チョムスキーが 1950 年代に提案した生成文法理論は、現在に至るまで人間言語の仕組みを解き明かすための重要な枠組みを提供しています。チョムスキーによれば、人間には生物学的な特徴として文法の仕組みが生得的に備わっていることとなります。即ち、私たちが普段用いている日本語や英語といった個別言語の土台には、人間としての普遍的な言語の仕組みがあることとなります。私はこの枠組みを用いて、文法理論及び統語論と意味論の関係を中心に研究を行っています。特に束縛や同一指示といった照応の問題（大まかに言えば、代名詞と先行詞との関係）について、人称代名詞と再帰代名詞の形態的・統語的性質と意味解釈の関係をとり上げ、英語と日本語を中心に通言語的研究を行っています。また、これらの問題と関連して、自他交替を含む項構造とヴォイス、焦点化、省略などの言語現象にも対象を広げて研究しています。

アピールポイント

どの言語にも代名詞という文法範疇が存在します。例えば、英語の he は日本語では「彼」と訳すことができます。確かに、He left. という文は日本語では「彼が立ち去った。」で問題ありません。一方で、Everyone admires his father. という文は、「誰でも彼の父を尊敬している。」ではなく、「誰でも自分の父を尊敬している。」のように「自分」という代名詞が必要となります。なぜでしょうか。このような疑問を発見し、説明するためには言語の仕組みを明らかにする必要があります。理論言語学は基礎的な学問領域ですが、人間が持つ特性の理解につながる大変魅力的な専門分野と言えます。

参考 URL

<researchmap(リサーチマップ)>

<https://researchmap.jp/read0183729>

子どもの驚くべき言語能力を引き出し、その豊かな言語能力を明らかにする

文教育学部言語文化学科 教授 山腰 京子

研究キーワード

第一言語獲得、言語学、幼児の言語発達、幼児の文法知識、生成文法理論

関連する SDGs



研究概要

子どもが母語をどのように習得しているのかに関して、大人の言語理論を基に、子どものことばの研究を行っています。英語だけでなく、日本語や他言語の発達との比較研究もしています。保育園に伺って子どもたちにインタビューしたり、データベース等を用いて親子の会話から子どもの自然な発話の観察を行い、子どもが持っている驚くべき言語能力を明らかにしていきたいと考えています。

アピールポイント

子どもたちは豊かな言語知識を2歳ごろから駆使していて、子どもの発話を観察していると驚かされることがたくさんあります。幼い子どもたちが駆使している言語知識を明らかにしていくことは、人間が持つ言語知識、そして他の動物にはない、人間だけが持っている特性の解明につながるのではと考えています。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/100001160_ja.html

価値の衰えない「古典文学」研究

文教育学部言語文化学科 教授 和田 英信

研究キーワード

中国古典文学、都市と文学、李白、王安石、漢詩

関連する SDGs

研究概要

梁・昭明太子の編んだ、文学アンソロジー『文選』は、その後の中国における文学規範として長く影響を与え続けました。唐代を代表する詩人、李白と杜甫もまたその影響のもと、みずからの文学を作りあげました。李白や杜甫が過去の文学規範をどのように受け継ぎ、そして新しい要素をつけ加えたのか、わたしはとくに李白詩を精読することによって研究しています。また唐の李白は金陵（現在の南京市）を舞台に多くの魅力ある詩を詠いました。そして宋代の詩人王安石もまた、金陵に居を定め、その土地の住人として特色ある作品を生み出しました。同じ一つの都市において詠われた、時代を異にする作品群を詳細に検討することによって、都市と文学の関わりを考えています。

アピールポイント

『文選』、李白詩、王安石詩などの翻訳を進めています。作品（詩）を精緻に読むことによってはじめて見いだされる中国古典文学の魅力を、一般読者の方に幅広く伝えることを研究者としての重要な職務と考えています。

参考 URL

<王安石詩についての研究成果（『王安石及び宋詩別裁 五言絶句訳注』）共著>

https://www.lib.ocha.ac.jp/e-book/list_0006a.html

<李白詩についての研究成果（新釈漢文大系 詩人編 4 『李白 上』）単著>

<https://www.meijishoin.co.jp/book/b450659.html>

<『文選』についての研究成果（『文選』詩篇 1～6）共著>

<https://www.iwanami.co.jp/book/b498253.html>

言語教育をサポートするための適切な評価の設計と使用

文教育学部言語文化学科 准教授 ALLEN DAVID BRIAN

研究キーワード

波及効果、Washback、言語テスト、4-Skills Tests

関連する SDGs



研究概要

テストは言語教育においてさまざまな役割を果たしています。私の研究は、評価が学習や指導に与える影響であるウォッシュバック効果を調査しています。ウォッシュバック研究の目的は、評価の利用がどのように教育の目標をサポートするか、あるいはそれに反するかを理解することです。そのために、研究者はしばしば、テストデータ分析、文書分析、授業観察、調査、インタビュー、フォーカスグループなどの手法を組み合わせた混合法的アプローチを用います。研究の成果は、評価の使用から生じる可能性のある肯定的な効果（例：言語学習の向上）を生み出し、否定的な効果（例：カリキュラムの狭小化）を緩和する方法について、具体的な提案を提供することができます。

アピールポイント

私の研究は、日本人の英語学習者が受験する語学能力試験の利用と、伝統的な大学入学試験の役割について調査したものです。これまで、TEAP やケンブリッジ英検 B1・B2 の高校での利用や、IELTS の大学での使用による波及効果について調査してきました。現在の研究では、大学入試で使用されるスピーキングテスト「BCT-S」(ブリティッシュ・カウンシル/東京外国語大学) の潜在的な波及効果を調査しています。これまで、British Council、Cambridge Assessment English、日本英語検定協会と共同で受託研究を行ってきました。また、日本におけるウォッシュバック効果の研究に関するレビュー (Allen & Tahara, 2021) は、日本言語テスト学会の最優秀論文賞を受賞しています。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000096_en.html

<ResearchGate(リサーチゲート)>

<https://www.researchgate.net/profile/David-Allen-31>

<Routledge(ラウトレッジ)>

<https://www.routledge.com/Washback-Research-in-Language-Assessment-Fundamentals-and-Contexts/Allen/p/book/9781032751016>

近代文学は科学をどう受け止め、どう「誤読」したか

文教育学部言語文化学科 准教授 加藤 夢三

研究キーワード

日本近代文学、モダニズム、新感覚派

関連する SDGs

研究概要

大正後期から戦時下にかけての文芸運動を、同時代の学知や思想状況と絡めて研究しています。特定の作家・作品の読解だけでなく、広く人文系以外の言論動向も視野に入れつつ、かつての知識人たちが「文学」という営みに託していた役割と意義を総合的に再検討することを目指しています。

アピールポイント

「文学」とは、単に人生を豊かに過ごすためのサプリメントのようなものではなく、(少なくともある一面においては、)世の中で正しいとされている道徳や社会常識にどうにも違和感を覚えてしまうひと、多くの人を感じているらしい現実世界のかげがえのなさがどうしても信じられないひと、他人には言えない何かしらの「闇」を抱えているひとのためのものです。そういう研究領域が大学という場に細々と残されていることが、ある種の人びとにとって救いになりうると私自身は考えています。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000694_ja.html

世界は音の不思議でいっぱいだ！

文教育学部言語文化学科 准教授 竹村 明日香

研究キーワード

謡伝書、日本語の発音、方言、キリシタン資料

関連する SDGs



研究概要

主に、日本語の発音の歴史を研究している。16世紀末に来日したポルトガル人宣教師たちの残したキリシタン資料や、江戸時代の能役者たちが書き残した謡の秘伝書などを使って、「当時の人々がどのように日本語の発音を捉えようとしたのか」という点を解明しようとしている。ポルトガル人たちは日本人が聞き取っていなかった音声差まで聞き取って書き残しており、また、能役者たちは五十音図（あいうえおの表）に「口のどの部位を使って発音するか」など書き残している。録音機器のなかった時代に、人々は日本語をどのように聞き取り、理解していたのかを明らかにするのが目的である。また、「『っ』は聞こえないのにどうして書くの？」といった子供達の発音に関する疑問に答えられるよう、音韻史の教科書を作成中である。

アピールポイント

1. 謡伝書には、近代の調音音声学に近い解釈が記されていたことが近年明らかになりつつある。この謡伝書の解釈は、契沖や本居宣長などの国学者にも影響を与えていたとみられる。謡と国学という、従来にない接点が明らかになってきており、日本語史・国学史・能楽史に新たな視界を開く可能性がある。
2. 低学年の子供は「音声」と「文字」のズレにつまずきやすい（「っ」や伸ばす音を書き落とす、など）。その要因には音韻史（発音の歴史）・文字史が関わっていることが多い。そうしたつまずきを解決するために、「なぜこの発音はこのような書き方をするようになったのか」という説明を行った子供向けの教科書を作りたいと思っている。また、日本語の発音の歴史について書いた子供向けの本も作成しており、機会があれば発刊したいと考えている。

参考 URL

<researchmap(リサーチマップ)>

<https://researchmap.jp/takeAAA2014>

一人一人にとって肯定的な経験となる日本語教育

文教育学部言語文化学科 准教授 西坂 祥平

研究キーワード

日本語教育

関連する SDGs



研究概要

第二言語としての日本語 (Japanese as a Second Language) の習得と学習について量的かつ質的に分析しながら、日本語教育における指導や支援の在り方を考えています。具体的には、日本語の習得プロセス (特にテンス・アスペクト)、教室内外での学び、日本語教師の役割や成長に興味を持っています。

アピールポイント

言語習得や言語学習に関する認知的側面の基礎研究を進めると同時に、実際の言語教育や言語使用の社会的側面を考慮しつつ、教師ができることを具体的に発信し、日本語教育関係者に届けることを目指しています。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000641_ja.html

言語と文学の謎に迫る

文教育学部言語文化学科 准教授 橋本 陽介

研究キーワード

中国語、物語、文体、言語一般

関連する SDGs



研究概要

一般向けのわかりやすい本を多数書いていますので、そちらをご覧ください。

アピールポイント

企業にアピールすることはありません。本屋に行ってください。

参考 URL

<著書情報>

https://www.amazon.co.jp/s?k=%E6%A9%8B%E6%9C%AC%E9%99%BD%E4%BB%8B&:crid=191F5A6XLT9C&:sprefix=%2Caps%2C299&:ref=nb_sb_ss_recent_2_0_recent

中国で失われた漢文古典を日本で発掘し、世界へ ～白居易をはじめとする貴重な漢文資料の再発見～

文教育学部言語文化学科 准教授 富 嘉吟

研究キーワード

漢籍、佚存書

関連する SDGs



研究概要

本研究では、白居易をはじめとする漢文古典籍の日本への伝来とその保存状況を明らかにし、中国ではすでに失われた貴重な漢文資料を発掘・紹介することを目的としています。日本の寺院や図書館には、長い歴史の中で大切に保管されてきた漢文古典が多く残されており、それらは中国の文学や思想、歴史を知る上で極めて重要な資料です。本研究では、それらの資料を調査・分析し、漢文古典がどのように日本で受け継がれ、保存されてきたのかを解明します。さらに、発見した資料の価値を広く発信し、日中の文化交流や学術研究の発展に貢献することを目指します。

アピールポイント

将来的には、デジタルアーカイブ化を進め、国内外の研究者が活用できるデータベースの構築を目指します。また、産業界においても、日本に眠る貴重な知的資源の活用が可能となり、観光・教育・出版などの分野で新たな価値創出につながることを期待されます。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000695_ja.html

戦後文学から見るオーストリアの自己像

文教育学部言語文化学科 准教授 前田 佳一

研究キーワード

オーストリア文学、ドイツ語圏文学

関連する SDGs

研究概要

1945年から1970年代頃までのオーストリアにおいて様々な歴史的・政治的 文脈が複合的に絡み合う中で文学と文化的アイデンティティ形成がいかなる関係にあったかを下記のサブテーマに基づき研究しています。

- ①戦後 オーストリア文学におけるナチズムの「過去」との取り組みと集合的記憶の関係
- ②「オーストリア的なるもの」の複合性
- ③冷戦下でのオーストリアの「アメリカ化」が文学へ与えた影響
- ④新世代作家によるオーストリア特有の保守的前衛文学の台頭
- ⑤文学産業における女性作家の地位確立

アピールポイント

敗戦国が文化的アイデンティティの毀損した 状況からいかにして文化的復興を成し遂げたのかというテーマは、同じく敗戦国であった日本の状況と比較できます。この研究を通じて日本の戦後以降のあり方についても検討し直すきっかけを与えられればと思います。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000251_ja.html

日本古典文学の研究

文教育学部言語文化学科 准教授 松岡 智之

研究キーワード

日本古典文学 平安時代

関連する SDGs

研究概要

『源氏物語』研究を中心とする、平安時代の日本文学の研究を行う。

アピールポイント

日本古典文学研究は斜陽分野であるが、そのようであるだけに、実際的価値・効用のない学術が社会から排除されないあり方を模索したい。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/100001091_ja.html

批判応用言語学

文教育学部言語文化学科 准教授 LOWE ROBERT JAMES

研究キーワード

ネイティブスピーカー主義、定性的研究方法、批判理論、批判的教育学、国際共通語としての英語

関連する SDGs



研究概要

私の研究は、国際共通語としての英語教育と、英語教育における差別の問題に焦点を当てています。特に、英語を母語としない人々が直面する差別を指す「ネイティブ・スピーカー主義（ネイティブ・スピーカーイズム）」について研究しています。英語を真に国際的な言語として教えるためには、言語教育における言語的偏見やその他の差別を認識し、それに立ち向かうことが重要です。私の研究は、英語を国際的なコミュニケーションの資源として発展させ、それによって国際交流を促進することを目的としています。

アピールポイント

国際共通語としての英語に関する研究は、英語を単に欧米諸国のネイティブ・スピーカーの言語と捉えるのではなく、真に国際的な言語へと変貌させる一助となるでしょう。実際には、国際貿易、学術交流、その他産業界が関心を寄せる分野を促進するために、英語をどのように用いるのが最適かを理解することにもつながります。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000793_ja.html

言語を通して社会と文化を見る

文教育学部言語文化学科 講師 李 址遠

研究キーワード

相互行為、ナラティブ、言語教育、アイデンティティ

関連する SDGs



研究概要

言語教育の分野に軸足を置きつつ、言語人類学の理論的視座を基盤に据え、言語を切り口にして社会と文化を捉え直すことを目指した研究を行っています。主な研究テーマは以下の三つです。

【言語教育・学習の捉え直し】

言語を教える／学ぶことを、特定の社会・文化・歴史的コンテクストを前提としながら行われ、新たなコンテクストを創出させる「実践」として記述すること

【言語使用とアイデンティティ】

人々が様々な場面で行う言語使用を通して自他のアイデンティティを形成・呈示する過程を記述し、自己と世界の構築における言語の役割を明らかにすること

【現代社会における排除と統合】

日本社会のマイノリティ（外国にルーツを持つ子どもなど）を巡る現状に注目し、現代社会が抱える課題を明らかにすること

アピールポイント

人々が自身を取り巻く世界を理解し、その中で自分と他者を位置づける過程において、言語は中核的な役割を果たしています。これは1世紀以上に亘る言語人類学の中心的なテーゼの一つですが、このような認識は一般の人々はもちろん、人文社会科学の研究者の間でも十分に共有されているとは言えません。社会生活における言語の働きを理論的な視点から捉え直すことは、私たちが自身を相対化し批判的に理解することにつながり、現代社会が目指す共存や共生といった目標の実現に大いに貢献する可能性を秘めています。私の研究は、言語を通して社会と文化を見るのが有する意義と可能性を、具体的な言語実践の分析を通して示そうとするものです。

参考 URL

<研究室 HP>

<https://sites.google.com/view/lee-jiwon-ocha/home>

中世後期・初期近代イングランドにおける文体受容への書物史的アプローチ

文教育学部言語文化学科 助教 新居 達也

研究キーワード

受容史、書物史、文体

関連する SDGs



研究概要

15世紀イングランドの詩人ジョン・リドゲイト（c. 1370-1449）によって考案され、主に聖書や典礼などのラテン語宗教テキストに由来する語彙を多用した装飾的文体である華麗文体（aureate style）が15世紀前半から16世紀半ばまでの読者によってどのように受容されたかを研究しています。多くの先行研究においてこの文体は、平明な英語文体での聖書翻訳を推進したキリスト教異端ウィクリフ派に対する正統神学の側からの反動として位置付けられてきましたが、本研究では書物史的な視座から写本と刊本におけるリドゲイトのテキストに付された書き込みや挿絵などのパラテキストを分析することで、読者層の広がりや華麗文体と同時代の宗教・政治上の支配的イデオロギーの関係性の検証を試みています。

アピールポイント

本研究の特徴は、本来、王侯貴族や高位聖職者を対象として書かれた華麗文体作品が、都市商人、地方の郷紳、女性読者など、社会階層、地理、ジェンダーの点でより多様な読者層によって受容されるようになった過程を書誌学的証拠を用いて実証的に考察するところにあります。また、ネットワーク分析などのデジタル・ヒューマニティーズの手法も取り入れることで、広範な読者層による受容の実態を包括的に捉えることを目指しています。

参考 URL

〈研究者情報〉

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/2000011111_ja.html

アメリカ南部文学を通じて考える倫理・道徳 ～地域のアイデンティティと人種問題～

文教育学部言語文化学科 助教 丸谷 徳嗣

研究キーワード

アメリカ南部、価値観、リベラリズム、個人主義、共同体

関連する SDGs



研究概要

人種差別問題を中心にさまざまを社会問題抱えるアメリカ南部の文学を研究しています。「自由」と「平等」の国であるとされるアメリカにおいて、時代遅れの非「アメリカ」的な社会であり文化的な汚点であるとみなされてきた南部の人びとが抱え持つ葛藤を描く文学作品を、道徳的・倫理的観点から考察しています。白人を苦しめる罪の意識や彼らが継る救いの可能性、アフリカ系アメリカ人の苛烈な差別との闘争や自由の追求などを、観念的な善悪としてではなく、個人の経験・思想と共同体の歴史・社会・文化が織りなす複雑な問題として理解することで、読み手としてのわれわれ自身の倫理的・道徳的価値観の涵養と陶冶を目指しています。これは同時に、民主主義・リベラリズム・個人主義といったアメリカ的な価値観の批判的な検討を不可欠のプロセスとして含む作業でもあります。

アピールポイント

本研究は、伝統的な文学研究・作品読解の方法論と併せ、マーサ・ヌスバウムやアマルティア・セン、チャールズ・テイラーといった哲学者や、共同体主義倫理学や徳倫理学といった他分野の知見を参照枠とすることが特徴です。善悪の基準を理論化することを最終的な目的とするのではなく、個々の文学作品を、個別具体的な背景・状況を抱え持ついわば思考実験の場とみなす、ケーススタディの形態をとります。これは、有名なトロッコ問題をより長大に複雑化したような問題として、ひとつひとつの作品を読み解く作業そのものを、倫理・道徳をあつかう実践的な教育・啓発の機会ととらえることで、いわゆるソフトパワーとして問題解決の基盤となる能力の育成・向上を目指すものです。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000688_ja.html

<researchmap(リサーチマップ)>

<https://researchmap.jp/marutani.atsushi>

<科学研究費助成事業データベース>

<https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000010866560/>

ことばの意味の背後にある論理と構造

文教育学部言語文化学科 助教 水野 輝之

研究キーワード

言語学、形式意味論、語用論、統語論

関連する SDGs



研究概要

可能性や因果、反事実性、選好、時間、意思決定といった人間の知的活動に関わる諸概念が、自然言語によってどのように表現されるか、そしてそれらが我々の言語の仕組みにどのような示唆を与えるか、という問題に関して、形式意味論の観点から研究している。近年は特に、反事実性を表す表現が、世界の様々な言語においてどのように組み立てられるか、その背後にどのような多様性と普遍性が存在するかという問題に焦点を当てている。他にも統語論と意味論のインターフェースに関わる現象、特に省略現象に関心がある。

アピールポイント

形式意味論は、言語学、哲学、数学、計算機科学、AI 研究等、様々な研究分野の知見が合流する極めて学際的な学術領域である。計算言語学を専門とする本学理学部情報科学科の戸次大介教授の研究室と、現在共同で進めている研究があり、AI による言語理解の性能の向上等、工学的な貢献も視野に入れている。

参考 URL

<個人 HP>

<https://teruyuki-mizuno.github.io/>

思想研究を通して、現代のあり様を批判的に考察する。

文教育学部人間社会科学科 教授 池田 全之

研究キーワード

思想、教育

関連する SDGs

研究概要

教育思想を研究しています。古の考え方は決して古いものではなく、現代を反省的に理解するための有力な武器になると思います。

アピールポイント

思想研究を通して今のあり様を反省的に理解しています。一見、有用性が見えないかもしれませんが、現代を俯瞰しうる視座獲得できると考えています。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/100001429_ja.html

社会の変化を子どもと教育という視点から考えています

文教育学部人間社会科学科 教授 小玉 亮子

研究キーワード

子ども、教育、家族、ジェンダー、グローバリゼーション、

関連する SDGs



研究概要

専門分野：教育学・子ども社会学・家族社会学（比較幼児教育、家庭教育）

現在、取り組んでいる研究や関心のあるテーマ：

- (1) 現代における子ども・教育・家族問題の社会学的分析
- (2) 幼児教育に関する比較社会学的研究
- (3) 近現代ドイツにおける、幼児教育・家族史に関する研究

アピールポイント

私たちの目の前にいる子どもたちは、社会や国家と無関係に存在しているわけではありません。トランス・ナショナルな現代にあって、子どもたちは変動のただ中で生きています。社会や国家、地球といった視野に立ち、比較という方法を重視しながら子どもの問題を考えたいと思っています。国や地域による違い、歴史的な変遷、そして、ジェンダーやエスニシティ、階層やセクシュアリティ等の多様なカテゴリーによって見えてくる差異に敏感になることによって、子どもたちの現在に少しでも接近できれば、と考えています。

参考 URL

<研究室 HP>

<https://www-p.li.ocha.ac.jp/hdev-kodama/>

信頼しうるウェブ調査実施についての方法論的検討

文教育学部人間社会科学科 教授 杉野 勇

研究キーワード

ウェブ調査, 社会意識, オンラインパネル

関連する SDGs



研究概要

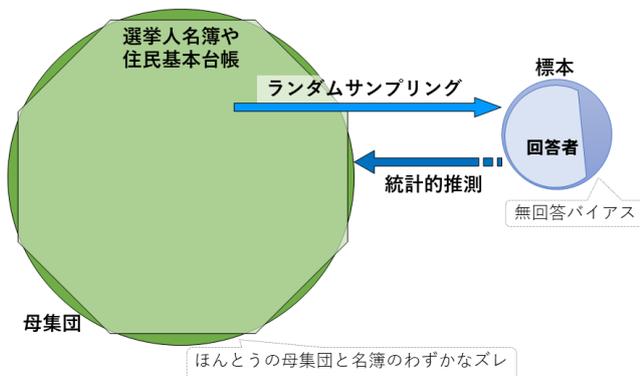
従来の学術的社会調査・世論調査よりも手軽で費用のかからないインターネット調査が普及する中で、学術的に信頼に値し従来型の面接・郵送調査よりも実施が容易となるウェブ調査の方法論的検討を行っています。

アピールポイント

社会調査やウェブ調査の設計・実施については、内閣府世論調査に携わった経験、消費者庁、日本弁護士会などでアドバイザー業務の経験があります。

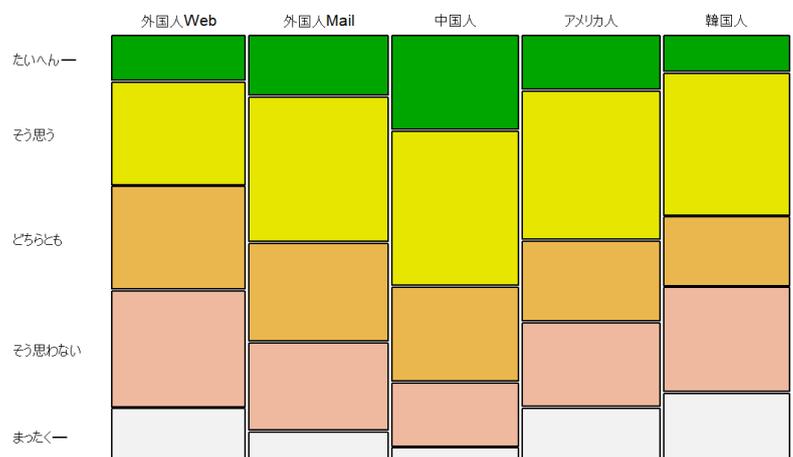
参考 URL

<研究室 HP> <https://www.li.ocha.ac.jp/ug/hss/socio/sugino/>



サンプリング

となりに引っ越して来たらかなり気になる



排外的態度についてのサーベイ実験

子どもと出会う保育学

文教育学部人間社会科学科 教授 西 隆太郎

研究キーワード

保育思想、精神分析学、保育・教育における関係性、動画による保育事例研究、保育学と臨床心理学の対話

関連する SDGs



研究概要

保育は保育者と子ども・家庭との関係性をベースにして成り立っています。その関係性は、一方的なものではなく、ともに育ち合う相互的なものです。とくに乳幼児との関係性は、言葉を超えて通じ合う体験を必要とします。それは子どもにとっても、保育者自身にとっても、心を動かすものであり、その人の生き方にも影響を及ぼしうる深い体験となり得るものです。

保育において子どもたちが展開する遊びやイメージを受け止め、信頼関係を深める上では、臨床心理学が一つの手がかりを与えてくれます。なかでも精神分析学、ユング心理学は、相互的な関係性の、言葉にしがたい無意識的側面について探究を重ねてきました。私自身、保育の場で子どもたちと出会い続けながら、こうした関係性についての研究を進めています。

保育学と臨床心理学を結ぶことで、人間を外から観察するだけでなく、深く出会う体験を通して理解する、新たな知を築くことを目指しています。

アピールポイント

相互的な関係性を、保育・教育の世界で探究してきたのが、倉橋惣三、津守眞です。この二人は、日本の保育をリードしてきた先駆者であるとともに、お茶の水女子大学の「子ども学」という独自の分野を切り拓いてきた研究者です。国際的にもまだ類を見ない倉橋・津守の伝統を受け継ぎ、研究と実践の深化・融合を進めていきたいと思えます。

近年では、動画を用いた保育の事例研究を進めています。保育には言葉だけでは描き出せない側面があり、動画は言葉を超えて体験を共有しやすい媒体です。解説字幕とコンパクトな編集によって、研修等においても、保育者の方々とともに考える上で有意義な媒体となっています。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200001104_ja.html

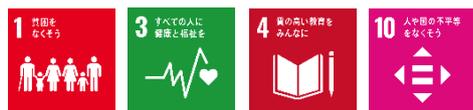
教育格差の克服に向けた実践的研究

文教育学部人間社会科学科 教授 浜野 隆

研究キーワード

学力格差、教育効果の高い学校、子どもの貧困

関連する SDGs



研究概要

近年、日本においても学力調査が幅広く行なわれるようになってきており、また、その結果に対応して政策立案がされる傾向にある。本研究では、学力調査の分析、政策の実施、関係者への研究成果の発信について検討を行っている。主に、(1) 教育効果が高い学校(効果的な学校)の特質を明らかにし、学力格差の克服につなげること、(2) 経済的に厳しい状況にあっても高い学力を達成している子どもや家庭の特徴を明らかにすること、(3) 日本の教育格差を国際比較の中でとらえ、その特質を明らかにすることをめざしている。

アピールポイント

本研究の特徴は、教育格差や学力格差の実態を明らかにすることにとどまらず、その克服のための実践的な課題を示すことにある。家庭の経済状況によって子どもの学力に差があることはしばしば指摘されるが、本研究ではその克服方法を具体的に示すことを志向している。学校、家庭、地域社会、行政など広く関係者に注目することによって実効性のある格差緩和策に繋げていくことが特徴である。

参考 URL

<平成 29 年度 保護者に対する調査の結果と学力等との関係の専門的な分析に関する調査研究>
-追加分析報告書-

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/1406895.htm

-分析報告書-

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/10/1406896_1.pdf

-分析報告書(概要)-

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/130/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2018/06/27/1405482_9_2.pdf

<平成 25 年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」>

https://www.nier.go.jp/13chousakekkahoukoku/kannren_chousa/pdf/hogosha_factorial_experiment.pdf

すべての子どもたちに質の高い保育を ～乳幼児ケア・幼児教育研修の設計・実施・評価～

文教育学部人間社会科学科 教授 浜野 隆

研究キーワード

保育、幼児教育、ECD（Early Childhood Development）、国際協力

関連する SDGs



研究概要

国際開発・国際協力の場において、幼児の発達や幼児教育は 1990 年代から ECD（Early Childhood Development）などの呼称で重要な領域として認識されるようになってきている。本研究では、諸外国における保育・幼児教育の現状分析と政策課題を明らかにするとともに、国際協力のあり方を検討する。国際協力の在り方の検討にあたっては、実際に幼児教育の現場に携わっている行政官や実践者への研修を設計、実施、評価する。そして、研修事業の実効性を具体的にデータで示す。

アピールポイント

本研究は、諸外国の幼児教育の実態を明らかにしたり、研修を実施したりすることにとどまらず、国を越えた協力、国際的な知識協創を志向するところに特徴がある。いうまでもなく、子どもの発達は社会・文化から様々な影響を受けており、国によって、地域によって、発達支援のニーズは異なる。本研究は、一方的な伝達研修ではなく、研修という場での意見交換を通して、何が子どもにとっての最善利益かを明らかにしつつ、研修を有効なものにしていく。

参考 URL

〈グローバル協力センター〉

<https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/index.html>

〈JICA 課題別研修「乳幼児ケアと就学前教育」〉

<https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/j/menu/activity/a20241206.html>

〈幼児教育分野における国際協力〉

https://www.ocha.ac.jp/intl/cwed_old/eccd/index.html

〈JICA 地域別研修-中西部アフリカ幼児教育-〉

https://www.ocha.ac.jp/intl/cwed_old/eccd/projects/O1.html

小・中・高等学校のカリキュラム支援

文教育学部人間社会科学科 教授 富士原 紀絵

研究キーワード

カリキュラム、授業研究、日本の教育実践史

関連する SDGs



研究概要

戦前と戦後初期の日本の学校のカリキュラム改革について専門的な研究をしています。その研究成果を踏まえて、社会の変化や学習指導要領の変化にともなうカリキュラムの開発の支援や、子どもの学習指導の改善に取り組む学校・教師の支援をしています。

アピールポイント

学校のカリキュラムや授業のあり方は国や地域の長きにわたる歴史的背景をもつものであり、その成果や課題を踏まえて今の学校教育のあり方を考えて行く必要があります。歴史を踏まえねば、今起きている問題の根本的な原因も分からず、解決の方向性も見失ってしまう恐れがあります。日本の学校教育の現実に即し、地に足のついた学校や授業改善を支援して行きます。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/100001299_ja.html

発達障害に関連する特性がある人々の心理社会的適応に関する検討

文教育学部人間社会科学科 准教授 齊藤 彩

研究キーワード

発達障害、発達障害特性、ASD、ADHD、心理社会的適応

関連する SDGs



研究概要

自閉スペクトラム症や注意欠如多動症をはじめ発達障害のある人々、あるいは診断閾下の発達障害に関連する行動特性のある人々は、その主症状と環境との相互作用の中で、さまざまな心理社会的適応の問題に直面しやすいことが指摘されています。一方で、診断の有無を問わず、発達障害特性のある人々の中にも、学校や家庭、社会生活において良好な適応を示すケースも決して少なくはありません。発達障害特性と心理社会的適応との関連メカニズムには、どのような要因が寄与しているのでしょうか。また、子ども期から成人期にまでわたる各ライフステージにおいて、発達障害特性のある人々の心理社会的適応の維持、向上のためには、どのような支援が有効なのでしょうか。このようなリサーチクエストに基づき、就学前、学校生活、高等教育段階、子育てといった多様なライフステージにおける発達障害特性と心理社会的適応との関連について実証的検討を行っています。

アピールポイント

発達障害の診断を受けている人々のみならず、診断閾下を含む発達障害に関連する行動特性に着目した検討を行っています。また、質問紙調査による量的研究とインタビュー調査による質的研究の双方によるアプローチを試みている点も研究の特色の一つです。教育・心理をはじめ、医療、福祉、保健などさまざまな分野の専門家と連携しながら研究ならびに研究成果の発信、社会実装を進めています。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000467_ja.html

人がつくる「規範」を保育現場のやりとりから考える

文教育学部人間社会科学科 准教授 辻谷 真知子

研究キーワード

保育・幼児教育、規範、きまり、人間関係、リスキーな遊び

関連するSDGs



研究概要

乳幼児期の子どもたちが家庭の外で他者と多くの時間を過ごす場である園（幼稚園、保育所、認定こども園等）で、「規範」（きまり、ルール、習慣など）に着目した研究を行っている。どのような規範が存在するのかという実態、規範に関する子ども同士のやりとり、保育者が大切にしたいと考えていることや園の理念、さらにそれらの複雑な関係性について研究している。主な研究方法は、園における日常場面の観察調査、保育者への質問紙調査やインタビュー調査などである。

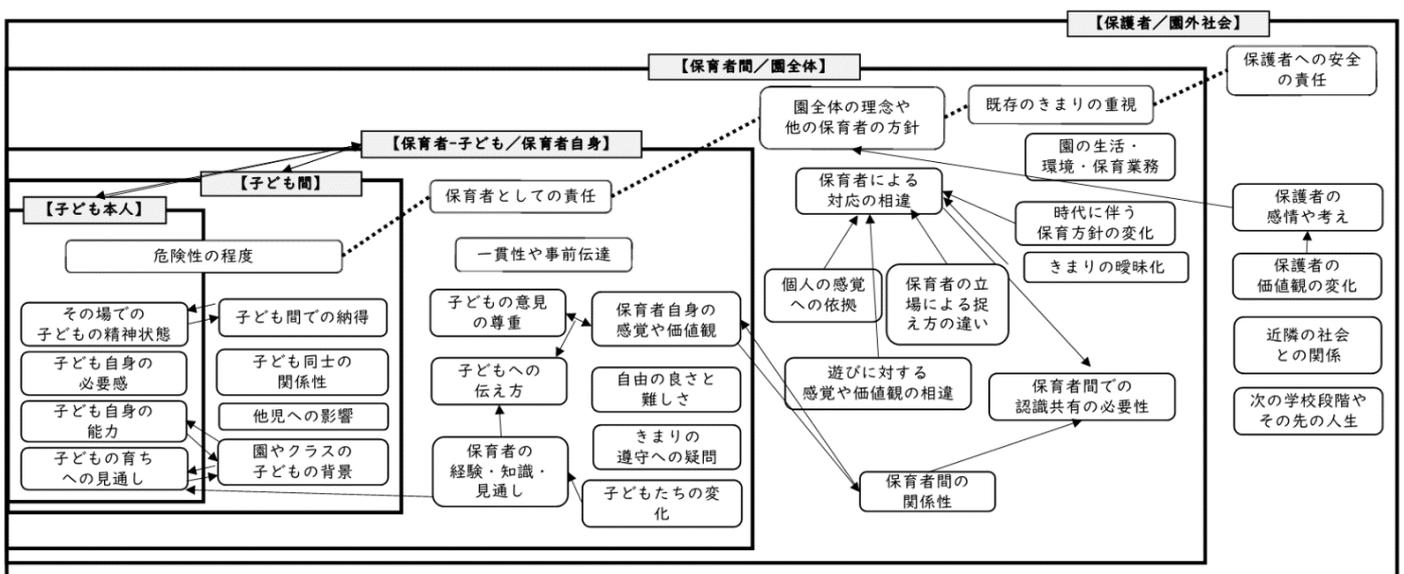
これらの関心を基盤に、具体的には以下のようなテーマで分析および成果報告を行ってきた。

- ・3歳以上児における子ども間での規範の示し方や捉え方の変容
- ・発話開始頃における、規範に関する言葉のやりとり
- ・園における安全のための制限やきまりと、それらに関する保育者の判断
- ・リスキーな遊びやけがについての保育者の捉え方

さらに保育・幼児教育分野での共同研究（園庭・戸外環境）を通して、以下のテーマでも成果報告を行なっている。

- ・園庭や戸外環境におけるルールと子どもの経験、保育者の考え方
- ・3歳未満児の戸外環境とリスク

安全のための制限やきまりについての保育者の判断に関する事柄



注) 矢印 (→) は語りから概念間の関連が想定される方向性, 点線 (···) はカテゴリー間で対応する概念であることを示す。

「出典：辻谷真知子（2024）保育実践における安全のための制限やきまりに関する判断—保育者への半構造化面接から—。教育心理学研究 72(4), 217」

アピールポイント

近年、「子どもの権利」「子どもの参画」といった概念が一般的にも知られるようになっていきました。一方で我が国の歴史や文化的背景から形成されてきた「子ども」イメージは簡単に更新できるものではなく、「規範」さらに「道徳性・規範意識」に関する教育も、望ましい方向へ大人が「導く」ものとして語られることもまだ少なくありません。本研究は人間がつくる「規範」とは何か、なぜつくるのか、などを子どものやりとりから探究していこうとするものであり、子どもの権利や参画の問題とも密接に関係します。同時に保育・教育現場でも課題となる、大人同士の価値観の相違にもアプローチするものです。研究を通じて、園で過ごす人々（子どもも大人も）が異なる見方や考えを共有する場をつくること、そしてより良い実践につなげるための議論の枠組みを提案することを目標としています。今後、保育・教育現場および運営する自治体や法人との共同研究、また関連分野として発達心理学（道徳性発達）、道徳教育、安全管理等の分野との共同研究も考えられます。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000697_ja.html

<園庭・地域環境での保育/子どもの遊び観調査研究プロジェクト>

<https://ecec-outdoor-and-play.jimdosite.com>

20 世紀日本において結核患者はいかに在宅療養したのか

文教育学部人間社会科学科 准教授 宝月 理恵

研究キーワード

結核、患者研究、20 世紀日本、歴史社会学、感染症

関連する SDGs



研究概要

現在の研究テーマとして、1920 年代を中心に戦前日本における結核の患者史に取り組んでいる。20 世紀前半の日本において結核は主たる死因のひとつであり、当時の結核患者の大半は、入院治療ではなく自宅や借家等での療養を余儀なくされていた。そのため、在宅療養患者を検討対象とすることにより、共住し看護を担う家族との関係性《ケアやジェンダーという論点》、どのような療養方法を選んで実践していたか《結核療法の選択と実践における経済格差、栄養療法という論点》、結核患者同士がどのように相互のつながりを求めていたのか《患者の社会性やアイデンティティ形成という論点》等の、互いに交差する複雑な問いが浮かび上がる。これらの問いを、結核患者の手記や患者専門雑誌を主たる資料として明らかにする研究に取り組んでいる。

アピールポイント

結核在宅療養患者（とその家族）の選択や実践、主体形成や患者同士の連帯を社会的に探求することによって、結核の感染症史を患者史の視点から拡充、補強することが期待できる。近年の新型コロナウイルスのパンデミックにおいても大量の在宅療養者が生まれたことは記憶に新しい。20 世紀における結核在宅患者についての社会学的研究を通じて、今後起こりうる感染症社会における病者との共生のありかたについて示唆を得ることを目指している。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/100001455_ja.html

人間を介して問題／政策・制度・支援を理解する

文教育学部人間社会科学科 准教授 三宅 雄大

研究キーワード

社会政策、貧困、生活保護、高等教育、スティグマ

関連する SDGs



研究概要

現在、生活保護利用世帯出身者が大学等就学／修学にあたり直面する課題について、当事者（学生等）へのインタビュー調査に基づき研究している。具体的には、同一の調査協力者に複数回のフォローアップ調査を実施することで、大学等入学の経緯、入学後の学生生活の継続に関する実態を高い解像度で把握することを試みている。その結果として、生活保護制度内での大学等進学支援の拡充、さらには、教育政策の拡充（大学等修学支援新制度の創設等）が行われ一定の効果が見受けられる一方、それでもなお、利用世帯出身者が不安定な就学状況に置かれていることが析出されている。この他、科学研究費助成事業・基盤研究（C）「公営住宅団地に対するスティグマの実態とその解消に関する研究」（研究分担者）、同基盤研究（C）「日本における「福祉の「ふさわしさ」 Welfare Deservingness」に関する実証研究」（研究代表者）に取り掛かっている。

アピールポイント

現在、遂行・計画している研究は、いずれも当事者（生活保護制度の利用者、公営住宅の住民、近隣住民、支援者、一般市民等）の視点を重視しており、同時に、広く政策・制度・支援の在り方を検討するものである。この意味で、当事者の視点だからこそ見えてくる知見が、現実の政策・制度・支援の貢献につながるものと期待される。

参考 URL

<researchmap(リサーチマップ)>

<https://researchmap.jp/yudai-miyake>

尊敬と感情の科学

文教育学部人間社会科学科 准教授 武藤 世良

研究キーワード

尊敬、感情、教育、発達、理論

関連する SDGs



研究概要

「尊敬とは何か」「感情とは何か」を主に感情科学・感情心理学・発達心理学・教育心理学の理論を基に研究しています。尊敬に関しては、憧れや畏敬などの類似感情も包括して「尊敬関連感情」と呼び、その機能や発達、個人差、文化間の類似と差異を探究しています。特に、優れた他者への心からの（感情的な）尊敬がその人をロールモデルにした追従を動機づけ、将来的に自身もその人のように成長することができる、という「自己ピグマリオン過程（self-Pygmalion process）」仮説（Li & Fischer, 2007）に関心を持ち、実証的に検討しています。感情に関しては、affect、emotion、feelingなどの日常・専門用語の整理や定義、emotionの現代の三大理論とも言われる基本感情理論、評価理論、心理学的構成主義、さらにはemotionの科学的定義に懐疑的な目標指向理論などを多角的に考察しています。

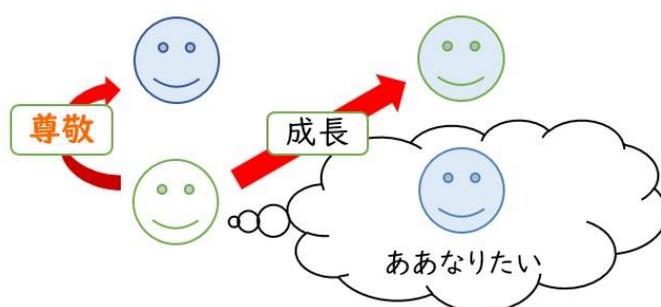
アピールポイント

尊敬（respect）は個人間・集団の階層（タテ）関係の維持や文化伝達にとっても重要な感情であると指摘されています。また、感情に関する研究は近年、増加の一途をたどり、産業界の分野でも注目されています。尊敬やさまざまな感情が個人の幸せや成長のみならず、社会・文化全体の維持や発展に与える影響プロセスやそのメカニズムを研究することは、グローバル化や高度情報化が進み、将来の予測が困難な今日の日本・世界をよりよい方向に変えていくためにも役立ちます。私自身はアンケート調査を主な研究手法としておりますので、尊敬やさまざまな感情が秘める機能性や可能性について、産業界の皆様とも一緒に考えていけましたら幸いです。

参考 URL

<研究者情報> https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000252_ja.html

<researchmap(リサーチマップ)> <https://researchmap.jp/seramuto>



尊敬の「自己ピグマリオン過程」仮説

保育をめぐる制度・政策・環境の歴史を繙く

文教育学部人間社会科学科 講師 松島 のり子

研究キーワード

幼稚園・保育所、保育用品、保育の環境、地域差

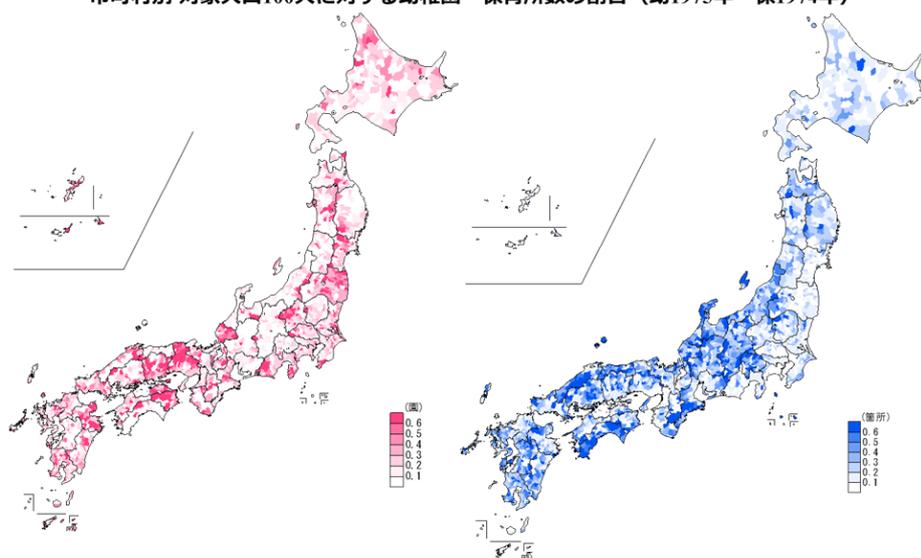
関連する SDGs



研究概要

戦後日本における保育実践の展開にかかわって、保育環境に着目して研究を進めています。とくに、保育の場ではどのような物があり、それらの物は園生活や子どもの遊びにどのように使われていたのか。保育者は環境をつくり出すなかで、物的環境にどのような工夫をしていたのか。これらについて保育教材や保育用品を製作し販売していた企業にも着目しながら、歴史的に明らかにすることをめざしています。また、戦後日本の保育政策、とくに1963年の「幼稚園と保育所との関係について（通知）」の研究にも取り組んでいます。幼稚園と保育所との関係をめぐり、国は「通知」をとおして一定の見解を示しました。その「通知」の発出後、各地域ではどのように保育施策が展開されたのか（されなかったのか）。国と各地域の動向を行き来しながら保育の歴史を描き出していきたいと考えています。

市町村別 対象人口100人に対する幼稚園・保育所数の割合（幼1975年・保1974年）



〈備考〉地理院統計局編『昭和50年 国勢調査報告』第3巻都道府県・市区町村編（47分冊）1977年、1975年10月1日現在。文部省監修『全国学校総覧』1976年版、東京教育研究所、1975年、949-1208頁、1975年5月1日。日本保育協会編『児童福祉施設一覧』保育所編、1975年、1974年7月1日現在に編者が「補正を加えたもの」により作成。

幼稚園・保育所の普及の地域差（市町村別：1975／1974年）

アピールポイント

保育・幼児教育をめぐる多様な実態とそれらの歴史的経緯について、国の制度・政策の動向も視野に入れながら、地域に着目した事例研究を重ね、保育環境や保育実践に焦点を当てた研究にも取り組んでいます。これらにより、日本における「保育」の普及とその歴史をめぐる全体像に、少しでも迫っていかれたらと考えています。そして、保育・幼児教育や子どもにかかわる課題の本質を捉えるとともに、これからの「保育」や保育・幼児教育制度のあり方を考えていきたいと思っています。

参考 URL

〈研究室 HP〉 <https://www-p.li.ocha.ac.jp/child-matsushima/>

クィアに交差する世界—国境・身体・物語の再構築

文教育学部人間社会科学科 助教 Iris Issen

研究キーワード

クィア、トランスジェンダー、国際移動・移住、デジタルメディア

関連する SDGs



研究概要

私は日本におけるクィア「外国人移住者」や「移民」について研究しています。少子高齢化が進む日本では、労働力不足を補うために外国人を受け入れると同時に、社会の多様化が加速しています。その中で、クィア外国人移住者は、性別や性的指向、出身国に基づく差別や社会的な孤立、法的支援の不足といった複合的な困難に直面しています。彼らが日常生活の中で直面する課題や構造的な不平等について研究し、必要とされる社会的・法的支援の在り方を考察しています。

アピールポイント

多様性が重視される現代において、クィア外国人移住者への理解は、企業の国際展開や人材戦略に不可欠です。本研究は、彼らが直面する課題や不平等の実態を明らかにし、異文化理解やダイバーシティ推進、そして新しい価値観に基づいたサービスや製品開発資する知見を提供します。また、社会の多様化に柔軟に対応するための戦略的なインサイトを提供し、産業界におけるイノベーションの推進力となるでしょう。

参考 URL

<個人 HP>

<https://www.iris-writings.com/>

「消費者としての子ども」の教育史—戦後教育史・子ども史の再構築へ—

文教育学部人間社会科学科 助教 渡邊 真之

研究キーワード

戦後教育史、高度経済成長期、現代っ子、子ども研究

関連する SDGs



研究概要

戦後日本、とくに高度経済成長期における教育・人間形成（子どもの育ち）の歴史を研究しています。この時代には、都市を中心に消費・マスコミ文化に親しむ「現代っ子」が登場しはじめます。学校・家庭・企業社会を越えて生きる「現代っ子」を捉え、教育のありようや子ども観を構築しなおそうとする試みが一部の教師や教育運動で生じていました。このような教師たちの教育論や教育運動の勃興と挫折の過程を研究とすることを通して、高度経済成長期の教育・人間形成全般の描き直しを試みています。学校内だけでなく、企業の消費者教育やサブ・カルチャーを含めた子どもの消費調査・消費文化の探究など、学校の外部における子ども研究の展開についても研究の射程に入れていきます。

アピールポイント

教育や子どもについての歴史研究の知見を活かして、現在の学校改革や子ども研究にもつながる視点を提供することも試みています。また、学校外の児童文化・子ども文化における子ども研究への貢献のほか、子どもを対象とした企業の消費者教育や子ども調査の理念の見直しなどに貢献できる可能性があります。

参考 URL

〈研究者情報〉

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200001109_ja.html

音楽文化の「意義」に関する研究

文教育学部芸術・表現行動学科 教授 井上 登喜子

研究キーワード

アート&サイエンス、音楽文化におけるダイバーシティ分析、社会の不確定性と音楽、レパートリー・データの実証分析、国際比較

関連する SDGs



研究概要

音楽活動を中心に、文化活動がその時々社会情勢や地域の特徴をいかに反映し、推移するかに関心をもち、実証研究に取り組んでいます。例えば、COVID-19 パンデミック前後での音楽レパートリーの需要／供給の変化と人々の音楽受容をめぐる意識の変化、DE&I の流れの中でのクラシック音楽活動における多様性の普及とトランプ政権下でのバックラッシュの音楽活動への影響等の分析を行っています。社会的コンテキストのなかで音楽の果たす役割を、データに基づき可視化し、人文知を用いて解釈しています。

アピールポイント

文化と産業の関係、文化活動を通じた多様性への貢献、地域社会における文化インフラの役割を探求している企業や団体、地方公共団体からの問い合わせが増えています。

参考 URL

井上登喜子『オーケストラと日本人』

<https://artespublishing.com/shop/books/86559-305-1/>



井上登喜子「クラシック音楽とジェンダー：「多様性」はクラシック音楽の救世主になるか？」
（『音楽文化の創造（CMC）電子版』特集「音楽とジェンダー」公益財団法人 音楽文化創造，第29巻，1-4）

<https://www.onbunso.or.jp/cmc-blog/21695/>

スポーツ消費の時系列分析

文教育学部芸術・表現行動学科 教授 新名 謙二

研究キーワード

スポーツ消費、時系列分析

関連する SDGs



研究概要

スポーツは現代日本社会において身近な存在であるとともに、近年ではその経済的影響も大きなものとなっている。2011年の東日本大震災の影響によるスポーツ消費の減少は一時的なものであったと考えられるが、2020年に生じた新型コロナウイルスによるパンデミックの影響は、スポーツ消費の構造にも影響を及ぼしたのではないかと推測される。これまで家計調査報告のデータ分析により、スポーツ消費と経済全体との関係について分析し、GDPとスポーツ支出との間に直接的な関係がないことが明らかになった。現在は新型コロナウイルスによるパンデミックの影響について、構造変化があったかどうかを分析する手法について検討している。

アピールポイント

スポーツと経済の関係は、近年プロスポーツに対する関心の高まりと共に、学問研究分野としても注目を浴びている。本研究では消費サイド、特に個人消費の視点から分析を行うものであり、個人消費拡大の牽引力としてスポーツ消費を捉えた場合に研究の意義は大きいものと考えられる。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/100001171_ja.html

ダンスを通して“よりよく生きる”ことの可能性を探る

文教育学部芸術・表現行動学科 准教授 岡 千春

研究キーワード

臨床舞踊学、舞踊教育、ダンスと健康、福祉とダンス

関連する SDGs



研究概要

踊ることで心身にどのような影響がみられるのかを研究の主テーマとして、ダンスの実践の場を対象に質的調査を行っている。現在は以下の主題に取り組んでいる。

1) 高齢者施設におけるダンスプログラム研究

要介護、認知症症状のある高齢者を対象としたダンスプログラムが、身体的・精神的フレイルへ及ぼす影響、より効果的なプログラム構成について、記録映像およびインタビューを基に調査する。

2) 中学校ダンス授業の学習目標・成績評価の課題

ダンス未経験の体育教員にとってダンス授業は苦手意識を感じやすいとされるが、その一因である成績評価基準の曖昧さに着目し、ダンス授業の望ましい学習目標の提示および評価方法について授業調査から明らかにする。

3) ダンサーの熟達

ダンス経験を重ねることで培われる身体への意識、身体感覚はどのように言語化することができるのか。ダンスにおける熟達について、インタビュー分析を基に理論構築を試みる。

アピールポイント

「ダンスを通じた人間形成」を研究の主軸として、幼児から高齢者までを対象に、社会におけるダンスの役割、在り方を探っている。教育の場だけでなく、福祉・医療の場にもダンスを基にした身体的コミュニケーションが心身の健康にプラスの影響を与えることが示されており、今後も様々な場でダンスは広がると予測される。こうした背景から、ダンスのどのような側面が、人間にどのように働きかけるのかをより明確に示すことが求められると考えている。インタビュー調査、観察調査を基に、一つ一つの事例を丁寧に分析することで、ダンスの場で起こっている現象を言語化し、教育や福祉におけるダンスの発展および充実化に貢献したいと考えている。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000443_ja.html

日本のコンクール文化と西洋音楽受容の関係性を問い直す

文教育学部芸術・表現行動学科 助教 神保 夏子

研究キーワード

コンクール、日本、洋楽受容史、高度成長期、国際化

関連する SDGs



研究概要

近代以降の西洋芸術音楽の職業演奏家を取り巻く制度や文化を歴史的見地から研究しています。近年では昭和初期から高度成長期にかけての日本のコンクール文化を主たる研究対象とし、西洋音楽実践の「後進国」としての立ち位置から出発した日本の音楽界が西洋の楽器や楽曲とともに「コンクール」という西洋的制度をもどのように受け入れ、自文化の文脈に組み込んでいったのか、またそれが第二次世界大戦後にとりわけ顕著になる日本の演奏家の国際進出のあり方とどのように関わっていたのかを、洋楽受容史、演奏教育史、国際交流史、メディア論などの視点から多角的に調査しています。

アピールポイント

客観的な優劣の判定がむずかしく、そもそも競うこと自体が活動の本来の目的から外れているとされる芸術や表現の領域において、コンクールとは良くも悪くも人の心をざわつかせる論争性の高いトピックです。メリトクラシー（能力主義）の原理は社会のあらゆるところに浸透していますが、職業演奏家の世界も例外ではありません。19世紀末以降、グローバルな競争システムとしての意味合いを獲得するコンクールの存在が、音楽に関わる人々の意識や生き方にどのような影響を与え、ひいては現代の音楽文化の一部をいかに形作ってきたのかを俯瞰的に明らかにしていきたいと考えています。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200001183_ja.html

舞踊芸術の実践を理論化する

文教育学部芸術・表現行動学科 助教 福本 まあや

研究キーワード

ダンス、コンタクト・インプロヴィゼーション、RFCDC、創造性、ソマティクス

関連する SDGs



研究概要

私の研究上の関心は、舞踊芸術家らが開発してきている即興や動きの探求のための方法論（芸術実践学）と舞踊作品の解釈理論（舞踊美学）にあります。研究の対象は、そうした方法論や作品手法に取り込まれている様々なボディワーク、他者と触れ合い重さのやりとりから展開する即興の形式コンタクト・インプロヴィゼーション(CI)、それからポスト構造主義の解釈理論です。現在の科研費受給研究（2023-2025）では、従来のダンス教育の価値基準では評価し難いCIの学習指導について、欧州評議会によるRFCDC（民主的な文化への能力枠組み）との交点からCI教材のループリック作成を進めるといふものです。同時に欧米のCI団体が進めるコンセント文化推進に資する動向をリサーチし、我が国におけるCI団体や指導者らと共有しながら、国内におけるCIの更なる普及とその知見の活用を推し進めることに取り組んでいます。

アピールポイント

コンタクト・インプロヴィゼーションは、社会生活においては厳格に制限され、教育の対象とされていない触れ合うという行為と感覚にフォーカスしたダンスの形式です。この形式は高度なダンス・ボキャブラリーの開発を可能にしつつ、一方ではダンス経験や障害の有無に関わらず様々な人が共に踊る形式として普及発展してきています。CIの現場に蓄積する知見は、現代社会が抱える人間疎外という課題の解決策を提示し得ると私は考えています。CIという二人称のダンス経験を理論化することで、CIの方法論をより多様な領域の方にアクセス可能なものとしします。

参考 URL

<研究室 HP>

<https://www.li.ocha.ac.jp/ug/geijutsu/buyou/otherinfo/research/fukumoto.html>

<researchmap(リサーチマップ)>

https://researchmap.jp/fukumoto_maaya

グローバル化によって国家権力の構成はどう変わるのか

文教育学部グローバル文化学環 教授 小林 誠

研究キーワード

国家、権力、グローバル化、組織的暴力、民主主義

関連する SDGs



研究概要

主権を仮託された国家が一定の領域を支配し、互いに国際法を介して相互関係を形作るという今日の世界の基本構造は、17世紀後半から徐々に形成されてきました。世界各地にまでこれが普及したのは、多くの途上国が政治的独立をおおよそ果たした1970年代以降のことで、つまり考えられている以上にごく最近のことです。ところがそれと同時に、グローバル化によって国境を横断する相互作用が増大・高速化したのですが、これによってできたばかりの世界の基本構造が揺らぎ始めています。端的なのは、戦争やテロリズムといった組織的暴力の形態や機能が著しく変化し始めたことで、古典的な国家間戦争はもはや珍しくなり、不正規戦争と呼ばれるグレーな組織的暴力が台頭してきています。世界の行方は？

アピールポイント

領域を支配する主権国家が権力を振るうという理解の仕方がいったいどこまで通用するのか。当たり前の認識枠組みを捉え直す姿勢を大切にしています。領域を越えた権力が生まれ始め、国軍による暴力とは異なった組織的暴力が台頭しているので、これを乗り越えるために、民主主義や市民社会といったナショナルな仕組みをもまたトランスナショナルあるいはグローバルに再編する必要があって、これは政治のイメージを大きく変えます。今とは違う未来の姿を予想し、対抗構想を立てる。これはとてもスリリングな試みです。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/100001061_ja.html

多様な角度からイラン史・西アジア史を研究する

文教育学部グローバル文化学環 准教授 阿部 尚史

研究キーワード

イラン史、ムスリム聖廟、家族、ペルシア語文化、アルメニア教徒

関連する SDGs



研究概要

18, 19 世紀イラン史について多様な切り口から研究しています。現在関心を持っているのは、サフィー廟という変転激しいムスリム聖者の廟の存続のための多様な試みと、財産管理・登録の制度的変遷です。また、以前から研究をしている家族の中の女性の役割、女性の財産権の研究も少しずつですが進めていく予定です。

アピールポイント

18, 19 世紀イラン史について多様な切り口から研究しています。現在関心を持っているのは、13 世紀以降イラン社会で影響力を保持していたサフィー廟という変転激しいムスリム聖者の廟の、存続のための多様な試みと、財産管理・登録の制度的変遷です。この廟は 16 世紀には王家の祖廟としてのサファヴィー朝という王朝の大いなる庇護を受けましたが、王朝滅亡後に大きく退潮しました。衰退期のムスリム聖廟の研究は世界的にも見られません。また、以前から研究をしている家族の中の女性の役割、女性の財産権の研究も少しずつですが進めていく予定です。

参考 URL

<researchmap(リサーチマップ)>

<https://researchmap.jp/abe.naofumi>



サフィー廟外観

日本における気候変動の政治経済

文教育学部グローバル文化学環 准教授 CARROLL MYLES

研究キーワード

政治経済、気候変動、日本、環境政策、ビジネス

関連する SDGs



研究概要

この研究は、日本の気候変動に関する政治経済を調査するものである。全体として、本研究には2つの目的がある。第一に、日本の気候変動政策の立案体制、企業の投資戦略、そしてそのプロセスにおける省庁、企業、その他の関係者の役割と利害関係について、より深く理解することである。具体的には、省庁および産業界のどの関係者がエネルギー政策や温室効果ガス排出削減政策の方向性を決定してきたのか、また、日本の排出削減実績や企業の投資戦略がその枠組みにどのように反映されているのかを明らかにする。第二に、第一の目的を通して得られた知見を踏まえ、2050年カーボンニュートラル目標を含む日本の中長期的な気候変動目標を達成するために、政策枠組みの改革や、企業による化石燃料投資を継続からカーボンニュートラルな代替策への迅速な移行を促すインセンティブの設計について提案することを目的とする。

アピールポイント

この研究は、日本のカーボンニュートラル目標達成や、より一般的な環境持続可能性の課題に関心を持つ政策立案者、産業界のリーダー、市民社会組織の関係者にとって、広く関連性のあるものである。気候変動を手遅れになる前に解決することは、現代の人類が直面する最大の課題であり、その達成には急速な脱炭素化が不可欠である。これまでに十分な行動が取られてこなかった根本的な要因を明らかにし、政府、地方自治体、企業、市民社会のあらゆる主体が実行的な行動を取れるようにするための包括的な戦略を策定することが、最終的にはすべての人々の利益につながると考える。本研究は、まさにそのために一助となることを目的としている。

参考 URL

<研究者情報>

https://researchers2.ao.ocha.ac.jp/html/200000624_ja.html